

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2021 春号

94

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集

闘雞神社の保存修理工事



特集 鬨雞神社の保存修理工事

一、はじめに ～神社の沿革～

熊野古道「紀伊路」を南に進み、現在の田辺市（会津川の左岸）まで来ると、そこから熊野古道は、紀伊半島を横断するように進む「中辺路」と、海沿いを進む「大辺路」とに分かれます。熊野三山（速玉・那智・本宮）のある「東牟婁」と田辺市街までの「西牟婁」を結ぶ街道が大辺路となります。鬨雞神社は、この大辺路街道を進み始めた街道沿いに境内を構えます。

現在は街の一面となつていますが、近世まではJR田辺駅周辺から扇ヶ浜にいたるまでの市街地を「権現松原」と称した、広大な境内の中にありました。江戸時代初期の記録に「権現鳥居内松千本植させ」とあることから当時の状況がうかがい知れます。明治時代になって、それまで和歌山城詰めであった紀州藩付家老・安藤家の家臣たちが移り住んで来る、その居住地として松原は開発されていきました。

鬨雞神社の歴史は、西暦419年、允恭天皇の御代に熊野権現をこの地に勧請したの

が起源とされています。一方で684年、武天皇の時代にお社が建った、という記録も残ります。また「神島」（田辺湾に浮かぶ島）から神光が上がり、神光は最初「仮庵山」（社の南側にある山）に降り立ち、しばらく休まれた神光はやがて龍仙山に登り、龍仙山から天に上つて行った、という龍神信仰も伝わります。以上のことから、龍神信仰を元にした祭祀の場所として開かれたのが允恭天皇の御代、熊野にみられる自然崇拜の形からお社を構えて神様に留まっていたのが天武天皇の時代。やがて平安時代後期に熊野参詣が盛んとなり、熊野別当家が田辺を支配していくなかで、この地を「熊野権現の聖地」として整え、それ以降「新熊野権現社」と称されるようになった、ということの様です。

さらにこの地は、西国三十三カ所巡礼において、第一番札所（那智山寺）から第二番札所（紀三井寺）へ向かう中継地点でもありました。中世以降、参詣道や巡礼路の要衝地となった新熊野権現社ですが、室町時代（明応年間）と戦国時代（天正年間）の2度の戦乱、足利と豊臣による兵火で荒廃してしまいま

す。その後、社殿の復興はなかなか進まなかったらしく、仮殿であった社殿がすべて再建されて現在の姿を取り戻すのは、実に150年以上経った後のことでした。

鎌倉時代に熊野別当家が支配した新熊野権現社は、室町時代になると「五院六坊」の社僧が執行職を勤めるようになります。また、明応年間の兵火後には、勧進聖たちが諸国をまわり、熊野信仰を勧めながら再興を成し遂げます。天正年間の兵火後にはその様相も変わって、江戸時代、紀州徳川家の統治後は、先で触れた紀州藩付家老・安藤家が田辺領主として修理・再興を指揮します。執行となった松雲院を中心に、新熊野権現社に属して来た本願（大福院）や願人たちが管理を行う形となりました。

なお、現在の社名は、明治初期の神仏分離令によるものです。源平合戦の折に行つたと伝わる「鶏合せ神事」を基に、近世中期には「鶏合大権現」「鶏合宮」「鬨雞宮」と呼ばれて来たことも判ります（写1）。



写1 竿に「鶏合大権現」と刻まれた元禄5（1692）年銘をもつ石灯籠

二、社殿と境内の建物

現在の社殿で最初に完成するのは、向かって左から3番目に建つ「上殿」です。明暦4（1658）年に氏子衆によって建てられました。当時は「若宮（殿）」と呼ばれました。続いて、上殿の左（東）側に「本殿」が完成します。棟札から、寛文元（1661）年に、田辺藩4代藩主・安藤直清公の寄進によつて建てられたことが判ります。それからほぼ百年後の元文2（1737）年、本殿の左（東）側に「西殿」が再建されます（写2左）。随分と長く仮殿の時代が続いた様です。そして、上殿の西側に並び建つ中殿（中四社）、下殿（下四社）、八百萬殿（満山宮）が延享5（1748）年に再建され、現在の社殿群が揃いました。6殿のうち棟札の残る5殿が全て6月（旧暦）に完成しており、田辺祭を意識しながらの施工でもあったと考えられます。

なお、本殿は「證誠殿」、その東隣の西殿は「西御前」と称され、社殿の配置も熊野本宮大社と共通しますが、当社本殿の祭神は伊邪那美命です。当社には『那智参詣曼荼羅』が伝わることから、中世以降の本願・願人たちの活躍や熊野那智大社、熊野比丘尼との関わりがうかがえる部分です。

参道の北側にある大福院には、明治期に当社境内から移された行者堂や大黒天神（社）

が現在も残ります（写3、令和2年春に修復工事を実施）。また、中辺路と大辺路が分かれる手前、江川地の蔵寺には、松雲院にあった文書類とともに護摩堂や大師堂が移されています（写4、護摩堂は近年に建て替わり、大師堂のみ現存します）。

明治22（1889）年8月の大水害で当社も被害を受け、明治30年代の境内整備で社殿前に瑞垣が築かれます。続いて明治45（1912）年には本殿前に拜殿と幣殿が新たに建てられました。したがって、現在の社殿周辺の構成は、大正年間以降に整えられたものとなります（表紙上写）。

明治期の当社は、社殿の手前に丈の低い木柵を並べて結果としていました（写5）。熊野本宮大社では、かつて社殿の縁下で参詣者たちが休んだ、と伝わる様に、当社もまた開放的、親密的な空間を形成します。

境内には、18世紀後半再建の弁天社に玉置社、戎社、弁慶社、藩祖・安藤直次公を祀った藤巖神社のほか、樹齢千百年や八百年の大楠などもあり、往時の松原はなくとも緑に包まれた社叢を留めています（写2）。境内と飯庵山は平成27年10月に「南方曼陀羅の風景地」の構成要素として国の名勝に指定され、さらに境内は翌28年12月に「熊野参詣道（大辺路）」の構成要素として世界遺産に追加登録されています。



写2 闘雞神社境内（左：西殿、中：藤巖神社と樹齢千百年の大楠、右：弁天社）



写4 地藏寺大師堂



写3 大福院行者堂（右）と地藏堂（旧・大黒天神）

三、保存修理事業

平成29年2月に国の重要文化財となった社殿6棟のうち、今回の事業では、本殿と上殿の2棟で軒までを解体する大掛かりな修理と、西殿と八百萬殿では木部の小修理を行う計画として、令和2年9月から令和4年7月まで、約2年掛かりの保存修理工事を実施しています。

近年の修理は、昭和59年頃に本殿、平成7年度に上殿で檜皮屋根の葺き替え修理が行われています。平成11年には西殿と中殿、下殿、八百萬殿の4殿で軒から上部の解体修理が行われ、その際に屋根が檜皮葺きから銅板葺きに変更されました。

工事はまず、瑞垣内に本殿と上殿を包み込む素屋根を建設し(写6)、その素屋根の中で



写5 明治中期頃の社殿前の様子(絵葉書より)西殿前から西側を見た状況。本殿前に拝所を構える他は木柵による結界とし、開放的な空間となっています。



写6 瑞垣越しに見る本殿と上殿(素屋根建設中)

屋根面の檜皮と軒までの木組みを、組み立てとは逆順に解体していききました(写7・10)。令和3年度からは、解体した部分の補修と組み立てを行い、檜皮屋根の葺き直し、塗装・彩色部分の補修作業などを進めていく予定です。

ところで、修理前の社殿を見たことがある方は塗装?彩色?と思われるかもしれませんが。実は、本殿と上殿は、360年前に再建されてから明治時代頃までは赤黒白緑に塗り分け、柱や彫刻部分などに彩色が施されて来た建物です。十数回ある屋根の葺き替え修理とともに、塗装修理も幾度か行われて来ますが、大正時代以降は塗り直されて来ませんでした。そのため、塗膜は色褪せ、浮きや剥がれ落ちるなどの劣化が進んでしまい、かつての様相がわかりにくい状態となっていました(表紙下写)。

今回の修理で両殿は、江戸時代前期の再建以来、最も大掛かりな解体修理を行うことになりました。修理によって、塗装・彩色の内容(配色や文様の範囲など)や変遷はさらに不明瞭となること

想定されました。そこで、解体に合わせて専門業者による調査・記録を実施し、その成果を今回や将来の塗装修理に反映させられるようにもしています(写11)。

四、社殿の特徴と本殿・上殿を中心に

本殿と上殿の建築は同じ形式です。丸い柱を左右に2本並べたものを1組とし、それを前後に3組建てます。この6本の柱どうしの間を横板や建具を入れて閉じ、床と天井を張った空間を「身舎」とします。身舎の内側は、後方の柱4本から成る「内陣」と前方の柱4本から成る「外陣」に分けられ、内陣と外陣の境も建具や御簾で仕切ります。身舎の外側は、四周に縁を廻らせます。その前方に四角い柱を2本建て、縁に上がる階段を設けます。この空間を「向拝」と呼びます。縁と階段の端には高欄を据えます。内陣にはご神体が安置され、外陣は神職が出入りする空間、外陣正面の格子状の建具越しに向拝を通して参拝する、という形態になります(表紙下写)。

建築用語ではこうした社殿を「桁行2間、梁間1間、隅木入り春日造、屋根檜皮葺き」と称します。当社の社殿の多くは四周に縁を廻らせ、正面斜め45度の方向に隅木という軒部材を配するなど、「春日造」の名称の由来でもある奈良・春日大社とはやや異なる、当

地方特有の意匠や形式を有しています。

工事前の資料調査では、江戸時代の中頃までは社殿の屋根の上に千木や勝男木を乗せていなかったことが判って来ました(写7)。中世や近世に描かれた熊野三山の社殿により近いすがたであった様です。

五、修理中にわかって来たこと

解体中の調査からは、文書に記された修理内容と対応させることができました。本殿では、寛延2(1749)年の「御拝(＝向拝繕)に相当する修理や、寛政5年(1793)に身舎部分の小屋組を改造した際の修理の内容のほか、正徳2(1712)年に「大風で本殿後方の松が倒れ屋根が少損」した際の補修と考えられる施工も把握できました。また、文化7(1810)年に「こけら葺き」で屋根葺き替え修理が行われたことを裏付けるものとして、当時の葺き材も発見されています。上殿では、屋根や木部の修理履歴とともに、塗装・彩色の変遷を追いました。建立当初から外観が彩られた上殿には、3時期分の塗装・彩色が存在していました。そのうち、文書記録にある文政11(1828)年の彩色修理は第2期のもので(図1)、現状(＝第3期)の施工は明治期と想定されます。なお、当社に関する修理記録は、有田市に



写7 千木と勝男木を降ろした本殿屋根



写8 檜皮と野地を解体した後の本殿



写9 軒まわり分解中の上殿



写10 軒までの分解を終えた本殿

ある浄妙寺本堂(薬師堂)や多宝塔と修理時期が一致していることもわかりました。(※)紀州藩主による寄進や修理、熊野参詣との関わりなどがうかがい知れそうです。

両殿に共通する塗装の特徴は、黒色を多用し黄色を使わない点や垂木の先端を緑色とする点など、他地域には見られない配色にも表れています(表紙下図)。墓股の彫刻も、本殿正面に安藤家、松雲院を表したであろう「下がり藤」と「松」、上殿では正面に「鶏合せ神事」、側面に「源頼政の鶴退治」など、当社ならではの画題を多く配しています(表紙左中写・図、図2)。

六、おわりに

今回は神社の歴史と事業の概要を中心にまとめました。施工の進捗や調査の続きは、今後の短信で紹介します。(下津健太郎)



(向拝柱)

図1 上殿第2期の彩色図案



(身舎柱)



写11 斜光ライトによる痕跡確認(右)と記録



図2 墓股彫刻の配色(上:本殿正面の「藤」、下:上殿側面の「鶴退治」)

(※)令和3年1～3月に有田市郷土資料館で開催された特別展「資料から読み解く浄妙寺多宝塔・薬師堂の歴史」で展示紹介された修理棟札や修復願は、寛文2年、享保3年、寛延2年など、闘鶏神社と同時期の修理が続いています。



発掘調査と文献資料

すさみ町立野遺跡の発掘調査

立野遺跡は、和歌山県西牟婁郡すさみ町に所在する遺跡で、平成22年度に近畿自動車道紀勢線の建設に伴い発掘調査(第1次)が行われました。弥生時代前期に埋積した自然流路からは多くの木材が折り重なり、それらの間からは、木製品や土器、石器などの遺物が多量に出土しており、それ以後も複数次にわたる調査が行われ、重要な発見が相次いでいます。また、第1次調査で出土した木製品、石器、土器は、平成29年3月17日に和歌山県指定文化財となっています。

今回の調査は、すさみ町による町道立野中道線外道路改良工事に先立って当文化財センターが実施したものです。調査区1では、これまでの第1～6次調査で確認した弥生時代の自然流路の南延長部を確認しました。今回ご紹介するのは、これまであまり明らかとなっていなかった遺跡の南端部

にあたる調査区2についてです。

調査区2は、全長80mのL字形の調査区で、砂礫層が約1.0～1.7m以上堆積していることを確認しました。この厚く堆積した砂礫層は河川が氾濫した土層、もしくは自然流路(川)そのものの堆積層と推定しましたが、出土した遺物が非常に少なく、この自然流路がいつ、どのようにして埋没したのかについては、発掘調査の成果だけでは断定できませんでした。

そこで発掘調査以外の方法で、この砂礫層の正体を明らかにすべく、すさみ町の近世から現代までの自然災害の歴史をまとめた『すさみ町誌』を紐解いてみたところ、そこには、「慶安の山津浪」(1652)という大規模な水害の記録が記載されています。口伝や現在の地形を考慮すると、調査地周辺である立野を流れていた周参見川の本流が、大関地の大堰を突破して背戸山沿いに流れたとされており、現在の周参見川の流れとなる、非常に大規模な水害であったことが伺えます。このことから、今回



図1 立野遺跡と文献からみた旧周参見川の流れ (S=1/20,000)

調査区2で確認した氾濫堆積層は、水害が起こる前の旧周参見川、もしくははその支流によって堆積したものと推定できました。今回は発掘調査と文献史料の双方の成果から、立野遺跡南端部の様相が明らかとなりました。より正確な歴史を知るため、様々な資料を読み解く必要を改めて感じた調査となりました。(瀨崎範子)

建具のはなし④ 旧西村家住宅の上げ下げ窓

新宮市にある重要文化財・旧西村家住宅は、文化学院創設者である西村伊作が自ら設計・監督して建てた自邸です。住宅改良の気運が高まりつつあった大正3年、電気・ガス・上下水道・給湯等を備えた洋風住宅を日本式に作り上げます。木や石など現地で採れる材料を駆使しつつ、洋式の設えを日本人の生活習慣に合わせてながら、地元の職人とともに採り入れていきました。

その一つ、ガラス窓2枚1組を上下に動かす「上げ下げ窓」は、壁面を縦長に切り取るため室内の採光や通風・換気に有効で、現在でも使われる建具です。窓の左右に窓の重さの約半分の重さの錘を滑車越しにワイヤーでぶら下げ、自由な位置で窓が留められる、という仕組みです。滑車は当時、高価な輸入品か国産の模造品しかなかったらしく、この建物では引き戸の足元で使われる戸車を代用しています。地元の職人たちと作り上げていった様子が垣間見られる部分でもあります。

(下津健太郎)



上げ下げ窓の構造(東南の張出し部分)

→クリ材で拵えたガラス窓は1枚あたり7~8kg。その重さに合わせた鉄製の分銅を左右に1本ずつ、滑車越しにワイヤーで結び付けてあり、窓の開閉に合わせて分銅が上下します。



旧西村家住宅の外観(東南から見る)

→外廻りでは扉や引き戸、上げ下げ窓が左右・上下に整然と配されています。閉めた際に下に来るガラス窓は、格子を中央1本のみとし、室内から見る景色を妨げないよう工夫しています。

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

埋蔵文化財課 ヒューミント(人的情報)の重要性

いささか旧聞に属することですが、奈良の橿原考古学研究所が卑弥呼の墓とも言われている箸墓古墳で実施している最先端の調査の模様が話題になっていました。宇宙から降り注ぐ「ミューオン」なる素粒子(?)を使い、古墳を透過して調査するというもの。

最先端の科学だけに、なにかすごいことがわかるようなニュアンスで伝えていたこともあり、考古学も宇宙からの時代かあと、感慨深いものがありました。ただその反面、どうも素直に領けなかった。その辺を代弁するように、筆者の知人がフェイスブック上で間髪を入れない確な反応してくれました。以下引用します。

『うーむ。勘違いさんたちがいろいろ発生中。これはね、ツールであって、解明や事実にはつき当たらない。解明には発掘調査のメスが不可欠で、CTやらMRIと同じと考えてほしい。病院で考えたらわかるよね。医者のおべと、各種検査の関係であって、万能の何でもわかる技術じゃない。』見事ですな。

F・フォーサイスの代表作のひとつ『神の拳』は1990年の湾岸戦争を舞台にしたもの。SISのマイク・マーチン少佐が敵地イラクに単身乗り込み、情報収集に活躍する物語ですが、彼が言いたかったのはいかに電子情報や通信情報を収集する技術が発達しても、人間の手になる情報の価値にすぐるものはない。つまり「ヒューミント」の重要性ですね。

発掘調査もしかり。最終的には担当者の執刀力、問題意識だと思ふなあ。40年以上、土にまみれてこの仕事をやってきた発掘屋としてはそう信じていますね。

以上は、引退する発掘屋が職場の若手に贈る遺言として。彼ら、彼女らの活躍に期待したい。

(村田弘)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2021年春～2021年夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 和歌山県内埋蔵文化財調査成果展「紀州のあゆみ～発掘された郷土の歴史～」
2021年 5月29日(土)～2021年 6月27日(日)

和歌山県立博物館

- 特別展「きのくに刀剣ワールド」
2021年 4月24日(土)～2021年 6月 6日(日)

和歌山市立博物館

- 春季企画展「総持寺の至宝」
2021年 4月24日(土)～2021年 6月13日(日)

高野山霊宝館

- 高野山霊宝館開館100年記念 大宝蔵展「高野山の名宝」
2021年 4月17日(土)～2021年11月28日(日)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。
掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 上：社殿6棟を北西から見通す
下左：本殿の修理前外観と配色復原図案
中：上殿向拝墓股彫刻「鶏合せ神事」の現状と彩色復原図案
下右：上殿の修理前外観と配色復原図案
- 2 特集「闘雞神社の保存修理工事」
- 6 埋蔵文化財課 短信「発掘調査と文献資料～すさみ町立野遺跡の発掘調査～」
- 7 きのくに歴史小話「建具のはなし④ 旧西村家住宅の上げ下げ窓」
「埋蔵文化財課 ヒューミント(人的情報)の重要性」
- 8 催し物案内

風車94 (2021・春号)

令和3年3月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp



LINE公式アカウント

ID: @942tjyhk

